

史上最大の渡洋上陸作戦

志村 良知

十三世紀の日本で起きた元寇、文永の役、弘安の役は、船に兵員と装備を載せて海を渡り、そのままに九州に強襲上陸しようとした当時として史上最大の渡洋上陸作戦であった。

上陸作戦では、攻撃軍は歩兵で渚とその周辺を制圧して橋頭堡を確保、重装備と司令部を揚陸し、通常の陸戦に移行させて作戦成功である。陸兵（馬も）は船に乗っているだけで消耗するので、第一波に全力を注ぎ、一気に陸戦に移行してしまわなければならない。長引いたら攻撃軍の負けである。その難しさゆえにアメリカは上陸作戦専門部隊である海兵隊を創り出した。

二度の元寇では、蒙古騎兵と新兵器に旧態依然の日本軍が圧倒されたが、ともに後世神風と呼ばれる暴風によって元軍の軍船が軍勢もろとも壊滅したため日本は救われた、と我々は学校や巷間で教わった。

しかし、嵐で戦闘部隊が軍船ごと壊滅したというのならば、戦闘経過の綿密な考証などせずとも、元軍の圧倒的優位説は嘘であると結論できる。

元軍の戦術は、まず小舟で歩兵を送って渚を制圧、馬の揚陸の為に軍船を直接着ける橋頭堡を確保、騎兵で内陸侵攻、であったであろう。

迎え撃つ鎌倉武士は源平の戦さから御家人同士の内乱まで、陸でも海でも謀略、奇襲、騙し討ち、とやりたい放題だった。これが元軍に対した時だけ名乗った上で正々堂々の個人戦など挑むわけがない。海上の小舟に長弓で矢雨を降らせ、渚では白兵戦得意の騎馬・歩兵集団が襲い掛かり海に追い落とす。沖の軍船も好き放題にかき回したに違いない。

元軍が軍船ごと壊滅したという事は、歩兵が渚で負けて橋頭堡が確保できず、馬の揚陸ができない騎兵が軍船に長期間押し込まれたままだった、という事である。文永の役では大宰府に向けて侵攻したという説がある。しかし、頼みの騎兵が上陸できないのに内陸侵攻などできるわけがない。

神風救国説は後世この戦いを記述した者の戯言である。鎌倉武士は元軍より悪辣かつ勇猛で強かったのである。